

昭和6(1931)年『長岡市主催上越線全通記念博覧会場図』について

Study on “Nagaokashi-syusai-Zyoetusen-zentukinen-hakurankaizyozu” printed at 1931

平山 育男
HIRAYAMA Ikuo

キーワード：平面図、長岡市、博覧会、配水塔

Keywords：plan, Nagaoka city, exhibition, water tower

1 はじめに

昭和6(1931)年における上越線の全通を記念し、長岡市の主催で行われた上越線全通記念博覧会において発行された鳥瞰図である『長岡大観』¹、『上越線全通記念博覧会鳥瞰図』（なお、本文では単に『鳥瞰図』とも略称する）について一昨年来、検討を加えてきた。

考察の結果、『長岡大観』は昭和6(1931)年8月21日、博覧会の開会式において記念品の1つとして市外からの来賓に配布されたものであるが、内容的には既存施設以外、不正確な内容が多分にふくまれるものであることが明らかとなった。

また、『鳥瞰図』も博覧会の開会式において記念品として配布されたほか、開催中も増刷が繰り返され、少なくとも内容が微妙に異なる3種類を確認できることを示した。

一方、これらとは別に“会場平面図”なるものが発行されたことが『長岡市主催上越線全通記念博覧会誌』（本文、注では以下、「会誌」と略称する）²において以下のように見ることができる。

会場平面図

設計確定するや七月十五日先ず二千枚を以後は消耗し尽したり、又は設計が変更する毎に改版して四回に亘り単色、二色、三色等に之を作り、上下隅の空欄に本会要項入場料及割引規定或は本会の誇りと題して数項の特徴を記載し後には会場案内記を記載して各方面へ配布し或は市内装飾業者に連名名入として配布せしめ又丸て及五十嵐運送店平石製綿商店で多数を印刷配布し、刈羽郡人会は八月一日本会から若干助成して五千枚を印刷同郡内に配布し、開会後は印刷屋が印刷販売した³。

昨年までの段階で、筆者は刈羽郡人会による資料は見る機会を得ていたが、会場平面図なる資料は未見であった。そのため、昨年度以後、資料の収集を努め、刈羽郡人会とはほぼ同内容で、長岡市発行の『長岡市主催上越線全通記念博覧会場図』1点を入手するに至った。

両資料とも表題は『長岡市主催上越線全通記念博覧会場図』とするため、本稿においては長岡市発行のものを『会場図（長岡）』（図1）、刈羽郡人会によるものを『会場図（刈羽郡）』（図2）と以後では記し、資料の総称として『会場図』、資料表面に印刷される図面自体は「会場図」と呼称する。そして、これらの『会場図』がどのような性格のものであったのかなどについて、考察を進め

て行くものである。なお、両図は79%に縮小して文末に掲げた。

2 『長岡市主催上越線全通記念博覧会場図』について

本章では『会場図（長岡）』と『会場図（刈羽郡）』について、資料の概要、大きさ及び体裁、内容について紹介を行いたい。

・概要

『会場図』は平面図の描かれる側を表面とし、上下2つ、左右を4つ折りとする。但し、現状において『会場図（長岡）』は先ず資料表面向かって左側を右側に合わせて谷折り、次いで裏面となった資料上側を下側へ合わせて山折り、更に資料向かって左側を右側に合わせて谷折りとして、全体としては表面を内側に折り込む形式とする。これに対して『会場図（刈羽郡）』は、資料表面向かって左側を右側に合わせる山折り、次いで表面中央を面向かって右側に山折りを繰り返し、更に表面下側を上へ山折りとして、全体としては資料表面右上部分が見えるような形式とする。

なお、『会場図』は表面向かって左側から「A」「B」「C」「D」、上下に2分して上から「1」「2」と区画して文字情報などの位置を示すために用いる。また、裏面も同様に向って左側から「a」「b」「c」「d」、上下に上から「1」「2」と区画し、以下の記載では、具体的な施設名などの位置についてはこの記号を用いて□囲みにより、適宜用いることとする。

・大きさと体裁

『会場図』の大きさは2資料間においてやや差異が見られたが、平均すると横548mm、縦395mmとなり、印刷は『会場図（長岡）』は表面のみ黄、青、黒の3色、『会場図（刈羽郡）』は表面3色、裏面黒1色となる。なお、『会場図』は表面向かって右下欄外に「長岡三盛館オフセット印刷」の文字が刷り込まれる。

・内容

表面は全体を0.7mm程の幅となる黒線で囲み、上部[B1]～[C1]に「長岡市／主催 上越線全通記念博覧会場図」（／は改行を示す）と記す。「会場図」は敷地全体の配置図で、北をやや向かって右側へ振り、正門を画面下とした配置とする。敷地、道路を白抜き、周囲を緑で網掛けし、緑地を緑、川と池を青、建物などの施設を黄で色分けする。

一方、向かって左下には横162mm、縦120mmで枠を設け「長岡市全図」を配する。「長岡市全図」は長岡駅から会場までの案内図を兼ねるものである。上を西北西として、長岡駅を下に配し主要建物を青丸印、会場までの経路と信濃川を青、会場敷地を黄で示す。

「会場図」では、正門から入りに、中央に[B1]噴水塔を設ける[B1]池を置き、この周囲に展示館などを構成となる。以下では、時計回りに各展示館などを挙げる。正門前には[B2]乗合自動車切符売場の他、[C2]自転車置場2カ所、[C2]人力車溜が配される。また、正門前には[B2]第二会場切符売場の他、[B2]便覧塔、[B2]明治製菓の塔も立つ。正門脇には[B2]商事相談所、正門を入ると[B2]郵便局、[B2]鉄道案内所、[C2]ポンプ置場などを配する。向かって左手へ進むと[B2]長岡出品館、背後に[B2]肥料館が続き、この周囲には[B2]都染塔、[B1]サンエス万年インキ、[B2]原酒造場塔が立つ。敷地南側に通用口があり、この東脇に[B2]鉄道記念館、北側に[B1]鉄道実演、[B1]野外ステージ、[B1]放送局特設館、[B2]時事新報と続く。鉄道実演が水道局の正門でここを入ると向かって左手に配水塔脇に[A1]エレベーターを設けた[A1]展望塔、この裏側を[A1]農機実演館と[A1]機械館とする。水道局の唧筒室は[A1]水道参考館とされ、屋根上には[A1]電光ニュースと記され、建物の北脇には[A1]染焼、東側正面には[A1]十見特設館が配される。有蓋の濾過池2基は[B1]展望台とされ両者を[B1]陸橋で結び北側には[B1]ダイヤモンドライトが設置された。なお、

この東側には[B1]水昌台があり水道局外の敷地には[B1]鯉の池が2ヶ所設けられた。そして展望台西側には[B1]北海道館、[B1]朝鮮館があり、水道局の敷地北辺には[B1]陸軍館、[B1]海軍館が並んで配置され、その前には[B1]海軍塔と[B1]千手観音大香炉を置いた。海軍館背面は[B1]学天則（人造人間）、[B1]満蒙館として、[C1]各府県出品館、[D1]新潟県出品館へと続く。なお、満蒙館前に[B1]新潟県人新聞、各府県出品館前西側に[C1]丸善、東側に[C1]静岡県茶業組合、[C1]ライオン歯磨が緑地の中に立つ。敷地北東角には[D2]演芸館があり、両脇に[D2]飲食店、並びに[D2]売店、[D2]長岡酒造、[D2]キリンビールの施設がある。演芸館正面には[D1]小供ノ国として柵の内側には[D2]メリーゴーラウンドを中心に[D2]ハゲスベリ、[D2]フジ山などが設置され、柵の横には[D1]水ナシアメ、[D2]メートル塔が立つ。演芸館南西は旧長岡商業学校（当時）の敷地で、敷地北側に[C2]健康館入口が立ち、東脇に[C2]越後新聞、西脇は[C2]マジックアイランド（魔法の国）とする。校舎は東から順に[C2]倉庫、[C2]健康館、[C2]健康別館、[C2]事務局、[C2]蚕糸館、[C2]漫画館、[C2]通信館、[C2]映写室、[C2]農林館とされた。外に戻ると、蚕糸館西に[C2]奈良特設館、[C2]鐘楼があり、[C1]三ッ葉食堂、[C1]森永製菓、[C1]岐阜特設館と続く。そして正門北側には[C2]京都特設館、[C1]台湾館、[C2]樺太館が池に向かって配され、[C2]名古屋出品館、[C2]福井物産館、[C2]宝翰堂文具館へと続く。

なお、会場内には便所が[B2]長岡出品館、[A1]機械館前、[B1]野外ステージ脇、[B1,C1]各府県出品館に2ヶ所、[C1]新潟県出品館裏、[C2]福井出品館裏にあり、白抜きで水と[B1]時事新報前に2ヶ所記入される。また、池周囲には約1.5mm径の円弧50個程、約3.5mm径の円弧60個程が記されが、これは街灯を示すようであるが必ずしも正確な位置ではないようである。

「長岡市全図」を見ると、凡例として主要建物、市小学校、社寺、鉄道、堤防、河川、道路と会場を挙げる。長岡駅東側には南寄りからカーバイト工場、福島江、栖吉川、中学校、グラウンド、農事試験場、長岡女師、斉藤女学校を挙げ、栃尾鉄道に対して至悠久山、至栃尾とする。駅西側は南寄りから工業学校、柿川、長生橋四八〇間、信濃川、公会堂、ケイサツショ、商工会ギ所、赤十字病院、裁判所、市役所、長岡銀行、郵便局、六十九銀行、水力デンキ⁴、内川⁵、実業女学校、新潟分工場、新潟鉄工所、長岡高女、伝染病院、北越製紙、城岡駅、水力電気カーバイトを記す。そして、長生橋西には至西長岡駅、国鉄南側には至柏崎、北側には至新潟と記される。なお、『会場図（刈羽郡）』では会場の凡例向かって左側に刈羽郡人会出張所として黄色の四角があり、図中の会場南側にその記号を見ることができる。

そして「会場図」向かって右上には「長岡市主催上越線全通記念博覧会概況」（以下単に「概況」とも記す）として期間が「昭和六年八月二十一日ヨリ九月三十日マデ」、会場は「第一会場 長岡市中島町」「第二会場 寺泊港（水族館）」、「経費 五十二万六千円」、「敷地 二万三千坪」、出品 二千七百十八小間「として、各府県館、新潟県館、長岡市館、機械館、農林館、健康館、満蒙館、朝鮮館、台湾館、北海道館、樺太館、名古屋特設館、奈良特設館と合計の出品小間数が「柵」「台」「土間」に分けて記される。なお備考には「土間ハ二倍ニシテ小間数トナス」「一小間トハ六尺ノ三尺」、朝鮮館下には「以下建坪ノ五割トシテ算出ス」とある⁶。続いて「主建物」として「五千八百七十坪」とされ出品本館以下、29建物の坪数が記され、「参加区域」は「朝鮮、台湾、樺太、北海道、関東庁、南洋庁、三府、四十県」、「全国商事 相談所」とする。また、「教育博覧会」は「坂ノ上小学校、九月一日―十五日」、「余興」は「演芸館、野外劇場、音楽堂、コードモ世界、魔法ノ国、人間製造等々」、「会場 ハ日本一ノ信濃川ニ臨ミ越後平野ノ中心点ニアリ中央ニ二千坪ノ池ヲ新設シ中央

ニ大噴水ヲ設ケ毎日五万石ノ水ヲ滝ナシテ放流ス／諸建築ヲ環状ニ配置シ場内何処ヨリモ大観シ得ルハ従来ノ雑然タル博覧会建築ト全ク趣ヲ異ニス」とし、「交通」は「上越新線ハ九月壱日開通シ直路一万メートル世界第九位東洋第一ノ清水トンネルニ依リ東京ヨリ急行五時間ニシテ到達ス」とある。

なお、以下に挙げる『会場図』表面下部の書き込みが『会場図（長岡）』と『会場図（刈羽郡）』では大きく異なる。『会場図（長岡）』では、「観覧の葉」として“●入場料（個人）”、“●観覧期間”、“●主なる観物（動くもの）”を挙げるのに対し、『会場図（刈羽郡）』はこれらに対して“在岡刈羽郡人会”として“顧問 野本恭八郎”を含め14名の会長、副会長、幹事長、常任理事、幹事の名前を挙げ、加えて“上越線全通記念博覧会郷土人接待委員”として“委員 早川与之吉”を含め15名を挙げる。

資料裏面も両資料で大きく異なる。『会場図（長岡）』では白紙とするが、『会場図（刈羽郡）』では広告とする。後者では先ず、裏面全体を2重線（外1mm太、内細線）で囲み、上下を115mm高の3段組、左右を50mm巾⁷の10マスの基本として組む。なお、広告自体は横1マスに限らず、1.5マス、2マス、3マスもある。上段向かって右側から小黒為策商店（2マス）、平石量平（1.5マス）、早津半治郎商店（2マス）、医学博士関衛（1マス）、西村医院（1マス）、鍋彦商店（1マス）、神林総本舗（1マス）、中段向かって右側から長岡館（2マス）、内山のパン（1.5マス）、鶴川亭食堂（3マス）、公会堂内食堂部（1.5マス）、常盤楼（2マス）、下段は向かって右側から小林譲（1マス）、北越時報（1マス）、戸川長太（1マス）、水野伝三郎（1マス）、不二館（1マス）、佐藤義平（1マス）、長岡甚句絵はかき（1マス）、原酒造場（1マス）、キリンビール（1マス）として、向かって左端の1マスは長岡発汽車時刻表として信越線上下、上越線より、長岡鉄道西長岡発寺泊行、自動車協定賃銀を挙げる。

・文字表記の方法

『会場図』表面では上で述べたように、施設建物などに名称が示されるが、いずれも棒などは設けない筆書のような仕様とする。また、「長岡市全図」も同様に施設名等は同じ仕様となる。一方、画面内に記される「長岡市主催上越線全通記念博覧会概況」「観覧ノ葉」はいずれも明朝体による活字、『会場図（刈羽郡）』では「在岡刈羽郡人会」「上越線全通記念博覧会郷土人接待委員」の文字をゴシック体、これ以外の役職と名前は明朝体の活字組とする。

『会場図（刈羽郡）』裏面は原則、活字組とする。

3 『長岡市主催上越線全通記念博覧会場図』の比較検討

本章では『会場図（長岡）』と『会場図（刈羽郡）』を比較検討して、両者の相違を示すこととする。

・「会場図」

「会場図」について『会場図（長岡）』と『会場図（刈羽郡）』を比較検討すると、図自体に相違は見られない。違いは『会場図（長岡）』が向かって右下に「観覧ノ葉」を印刷するのに対し、『会場図（刈羽郡）』では「在岡刈羽郡人会」「上越線全通記念博覧会郷土人接待委員」を刷り込む点である。それ以外は全く同一内容と見なすことができる。

・「長岡市全図」

「長岡市全図」も基本的には『会場図（長岡）』と『会場図（刈羽郡）』の両図では共通するが、『会場図（刈羽郡）』において、凡例として「刈羽郡人会出張所」を挙げ、図中にその場所を示す点のみが異なる。

・裏面

既に述べたように、『会場図（長岡）』では白紙とするが、『会場図（刈羽郡）』では広告とする。

表 1 「会場図」に示される出品小間数

	棚	台	土間	計	計算合計
各府県館	612	133.5	35	815.5	815.5
新潟県館	182.5	950	52	381.5	1236.5
長岡市館	157	15	110.5	393	393
機械館	6		216	438	438
農林館	15	19	25	84	84
健康館	80	85			165
満蒙館			40		80
朝鮮館			66		132
台湾館			25		50
北海道館			43		86
樺太館			18		36
名古屋特設館			40		80
奈良特設館			18		36
計 (A)	1,176.50	1570	677.25	2718.5	3632
計算合計 (B)	1,052.50	1202.5	688.5	3632	
誤差 (A - B)	124.00	367.50	- 11.25	- 913.50	

表 2 『会場図』に示される出品小間数（新潟県館の台数を訂正）

	棚	台	土間	計	計算合計
各府県館	612	133.5	35	815.5	815.5
新潟県館	182.5	95	52	381.5	381.5
長岡市館	157	15	110.5	393	393
機械館	6		216	438	438
農林館	15	19	25	84	84
健康館	80	85			165
満蒙館			40		80
朝鮮館			66		132
台湾館			25		50
北海道館			43		86
樺太館			18		36
名古屋特設館			40		80
奈良特設館			18		36
計 (A)	1,176.50	1570	677.25	2718.5	2777
計算合計 (B)	1,052.50	347.5	688.5	2,777	
誤差 (A - B)	124.00	1,222.5	- 11.25	- 58.5	

表 4 会誌に見られる各府県館の出品小間数

		陳列棚	陳列台	土間	計
本館小計	A	878	302	260.5	1701
新潟市	a	184	106.5	51	392.5
長岡市	b	170	14	103.5	391
奈良市	c	5	4		9
名古屋市	d	9	34.5		43.5
各府県館 (本館差引)	A-(a+b+c+d)	510	143	106	865

表 5 会誌に見られる各館の出品小間数

	棚	台	土間	計	計算合計	備考
各府県館	510	143	106		865	
新潟県館	184	106.5	51		392.5	
長岡市館	170	14	103.5		391	
機械館	2		209		420	
農林館	15	12	31	1	90	東京の計に 1 のみ記載
健康館	63				141	
満蒙館			32		64	
朝鮮館			33		66	
台湾館			15		30	
北海道館			43		86	
樺太館			18		36	
名古屋特設館	9	34.5			43.5	
奈良特設館	5	4			9	
計 (A)					2364	←縦軸計算合計 A2
計算合計 (B)	958	314	641.5	1	2556	←横軸計算合計 B2
誤差 (A - B)					78	←誤差 A1-B2

表 6 『会場図』に見る“主建築”と会誌に見る主な建物の面積

建築名	「会場図」 “主建築” 面積[坪]	会誌に見る 主な建築の 面積[坪]	会誌掲載頁	備考
出品本館	1831.9	1931.9	p127,128	博覧会建築工事、第三出品館
長岡市出品館	629	629	p127	
機械館	408.2	408.2	p127	
健康館	253	160	p146	
水道参考館	171.2	171	p146	
蚕糸館	90	250	p363	
農林／通信館	200	200	p146	
郵便局出張所	16	16	p213	館外土地使用表、p142 では鉄道案内所と 1 棟で 28.5 坪とする。郵便局の方がやや大きい。
放送局特設館	51	50	p129	ラヂオ館
国防館	240	240	p127	
鉄道記念館	50	150	p128	
鉄道案内館	15	12.5	p130	郵便出張所と併せて p142
野外ステージ	357	36	p127	ステージ25.5坪、露天舞台10.3坪
正門	95	95	p128	
朝鮮館	132	80	p130	p213 に土地坪数 132 坪
台湾館	50	50	p128	
北海道特設館	85	82.5	p130	p213 に土地坪数 86 坪
樺太特設館	36	46	p144	p213 に土地坪数 36 坪
名古屋市特設館	80	92	p214 有料部分	
奈良特設館	36	51	p214 有料部分	
京都物産館	60	66	p214 有料部分	
岐阜市特設館	30	38	p214 有料部分	
余興館	205	204.5	p128	マゼックアイランド
水族館（第二会場）	80	81.5	p628	
無料休憩所	67	78.64	p215	
演芸館（協賛会）	440.6	440.6	p127	
売店	120	108	p143	
塔食堂其他雑建築	368.5	511.3	p215 ～ 217	
計 (A)	5877.1			
計算合計 (B)	6197.4	6179.64		
誤差 (A - B)	- 320.3			

表3 会誌“各館出品表”に見られる上越線全通記念博覧会における各館出品小間数

団体名	記号	本館及び各館					機械館				農林館					総計				
		陳列棚	陳列台	土間	計	計算計	陳列棚	土間	計	計算計	陳列棚	陳列台	土間	計	計算計	陳列棚	陳列台	土間	計	計算計
関東庁				32	64	64														
南洋庁		6		1	8	8														
東京府		67	32	6	111	111		7	14	14				1	1	67	32	13	126	126
東京百貨店協会				12	24	24														
東京日々新聞社				7	14	14														
京都市		30			30	30														
大阪府		43		11	65	65		2	4	4						43		13	69	69
神奈川県		4		6.5	17	17		3	6	6						4		9.5	23	23
兵庫県		13	9	9.5	41	41														
長崎県		2			2	2														
新潟県		184	106.5	51	392.5	392.5		87.5	175	175	14	9.5	14	51.5	51.5	198	120.5	152.5	619	619
長岡市		170	14	103.5	391	391	2	63	128	128		1.5	10	21.5	21.5	172	15.5	176.5	540.5	540.5
埼玉県		11	6		17	17		5	10	10						11	6	5	27	27
群馬県		30	13	1.5	46	46		11	22	22						30	13	12.5	68	68
奥利根温泉組合		1			1	1														
千葉県		4.5			4.5	4.5														
茨城県		8			8	8														
水戸市								2	4	4										
栃木県		10			10	10														
足利織物共同組合		3		10	23	23														
奈良市		5	4		9	9														
三重県		16		4	24	24		2	4	4						16		6	28	28
名古屋市		9	34.5		43.5	43.5		5.5	11	11						9	34.5	5.5	54.5	54.5
豊橋市		3	2		5	5														
岡崎市		4			4	4														
一宮市		5	5		10	10														
静岡市		15			15	15														
山梨県		7			7	7														
滋賀県		10			10	10														
岐阜市		2	8		10	10		3	6	6						2	8	3	16	16
大垣市		2			2	2														
長野市		3	18		21	21														
松本市			10		10	10		1	2	2	1	1		2	2	1	11	1	14	14
上田市		5			5	5														
桔梗ヶ原葡萄酒組合			1		1	1														
仙台市		5	7	2	16	16														
若松市		3			3	3														
喜多方漆器同業組合		1			1	1														
原ノ町木工研究会		2			2	2														
岩手県		4.5	2.5		7	7														
青森市		5		2	9	9														
山形県		9	13.5	1.5	25.5	25.5														
秋田県		10	1		11	11		1	2	2			7	7	14	10	1	19	20	27
秋田市																				
福井県		15			15	15														
石川県		10			10	10		8	16	16						10		8	26	26
富山県		11	1		12	12														
鳥取県		6	3		9	9														
岡山市		9	6		15	15		8	16	16						9	6	8	31	31
津山市		3			3	3														
広島市		10			10	10														
尾道市		2			2	2														
呉市		7			7	7														
福山市		3			3	3														
山口県			4		4	4														
山口市		1			1	1														
和歌山県		7			7	7														
徳島市		5			5	5														
香川県		5			5	5														
愛媛県		17			17	17														
高知市		10			10	10														
福岡県		14			14	14														
日本足袋株式会社		2			2	2														
別府市																				
熊本市		6			6	6														
宮崎市		10	1		11	11														
鹿児島市		10			10	10														
那覇市		3			3	3														
小計	A	878	302	60.5	1701		2	209	420		15	19	25	84		895	321	494.5	2205	
計算小計		878	302	260.5	1701	1701	2	209	420	420	15	12	31	83	90	895	523	711.5	2204	2211
朝鮮館					33															
台湾館					15															
樺太館					18															
北海道館					43															
小計	B				109															
計算小計					109															
陸軍館					65															
海軍館		20	30		50															
放送局					20															
通信館					48															
鉄道館					50															
水道参考館					25															
蚕糸館					244															
健康館		63			141															
漫画館					15															
肥料館					20															
宝翰堂文具館					12															
小計	C				690															
計算小計					690															
総計					3004															
計算総計					3003															

4 『長岡市主催上越線全通記念博覧会場図』の内容検討

・“概況”における“出品”及び“出品小間数”の検討

内容の項目で述べたように、「会場図」向かって右上には“出品”として“出品小間数”が表として示される。但し、これらの表では“計”欄に示される数字が計算上では異なっており、数字自体の根拠も明らかではない。以下では、“出品小間数”の実際について、会誌などの記述を根拠に検討してみたい。

まず「会場図」に記される数値を単純に表化したものが表1となる。なお、「会場図」では朝鮮館の下に“以下建坪ノ五割トシテ算出ス”とあるが、これは後述する“主建築”の建坪数に対して、“出品小間数”における土間の面積を“建坪の5割とする”ことのものである⁸。

さて、表1を確認するため計算合計欄を設けたが、各館の計欄と計算合計欄で差が大きいのは新潟県館で、この台数が極めて多い。そのため950とされる台数を95とすると、合計は381.5となり計の数値と合致する。この数値を反映させたものが表2となる。但し、このように考えても、縦軸に対する計(A)欄は計算合計(B)とはどれも合致せず、計(A)欄は誤差を含む数値となることがわかる。

それでは、実際の出品小間数はどれ程であったのだろうか。会誌には“各館出品表”として本館、機械館、農林館ほかに、朝鮮館など15館における陳列棚、陳列台、土間、計、出品点数、出品人数が記され⁹、これを表化したものが表3となる。

“各館出品表”においても“計”と計算計などとの間に若干の誤差が見られる。問題となるのは農林館における計と、健康館における計である。“各館出品表”において農林館の小計は陳列棚15、陳列台19、土間25、計84とされるが、計算計では陳列棚15、陳列台12、土間31、計83となる。一方、農林館へ出展した各団体の計の合算となる計算計は90となる。前出の83との誤差7は、“各館出品表”で秋田市における表記において土間7、計7とすることによるのであろう。土間は1坪を2小間とするためここでは計14とすべきで、ここで7の誤差が生じることとなる。なお、“各館出品表”の農林館の欄で不審な点は、東京府が、陳列棚、陳列台、土間ともに出展数が挿入されていないにもかかわらず、計1とする点である。ここでは東京府による農林館への出品点数が259、出品人員1¹⁰、とあることから東京府から農林館へ出品のあったことは確認できそうである。仮に土間を1とすれば計2となり、“各館出品表”農林館における小計84と合致することとなる。

また、“各館出品表”の健康館では陳列棚を63、計141として計算が合わない。陸軍館から宝翰堂文具館における計は健康館における141を用いても誤差はないことから、ここでは健康館における陳列棚もしくは土間における数字が未記入と考えたい。

さて、“各館出品表”では総計として出品小間を3004小間とする。これは、“各館出品表”において本館などの小計1701、機械館の小計420、農林館の小計84(記号A)及び、朝鮮館などの小計109(記号B)と陸軍館などの小計690(記号C)の各々で求めた小計を合算したものである。但し、この内農林館84には既に述べたように誤差があり、農林館の計算小計83を用いれば計算総計は3003、更に農林館における秋田市の計算計14を用いれば農林館における計算小計は90となり、計算総計は3010となる。ここでは最終的な計算総計として3010を採用することとする。

さて、「会場図」における“出品小間数”と比較するためにはもう少し数字を整理しなければならない。それは会誌の“各館出品表”における本館分には新潟県、長岡市、名古屋市、奈良市など「会場図」においては独立させている団体名を見ることができるとである。つまり、“各館出品表”からこれらの分を差し引いたものが実質的な本館分となるわけである。これを考

えるために作成したのが表4となる。表4では表3でまとめられた本館小計から上述した各団体の数値を差し引くと、これが各府県館の数値となる。表4最下段がその数値で、陳列棚510、陳列台143、土間106、計865小間となる。そしてこの値と、表3に挙げた会誌における各館の数値をまとめたものが表5で、これと表2にまとめた「会場図」との対応が可能となる。

最終的に「会場図」における出品小間数と会誌に見られる各館の小間数を比較すると、両者が同一の値をとるのは北海道館と樺太館に限られ、その他はいずれも大きく数値が異なることとなる。

恐らくその理由は、この『会場図』の作成が設計の確定した昭和6(1931)年7月15日とはするものの、以後も多くの変更などがあったためと考えることができよう。そのような様子をよく示すのが、既に述べた朝鮮館下に“以下建坪ノ五割トシテ算出ス”とあるように、『会場図』の作成自体、この段階における予定に基づき制作がなされたためといえよう。

・“概況”における“主建築”の検討

“出品小間数”に続いて、「会場図」の“概況”には“主建築”として出品本館と28館建物の面積が記される。これをまとめたものが表6向かって左列となる。ここでも、各建物に示される面積の計5877.1坪は、計算計6197.4坪とは誤差が320.3坪もある。

そこで実際の建物面積を会誌から求めたものが表6の向かって右列である。実際の合計は5999.39坪となり、「会場図」“主建築”計算計との誤差は198.01坪となる。

『会場図』と会誌において、同一の値をとるものは28館に対し長岡市出品館、機械館、農林／通信館、郵便局出張所、正門、台湾館、演芸館(協賛会)の8項目で、水道参考館、放送局特設館、鉄道案内館、北海道特設館、余興館、水族館(第二会場)は誤差が3坪以下である。なお、参考として会誌と『会場図』における概要の比較を表7にまとめた。

“主建築”の坪数にもこのような誤差が含まれると理由は、“出品小間数”と同様、『会場図』が開催よりも1ヶ月以上早い制作に関わるためと言えよう。

・“概況”における“参加区域”の検討

参加の県数については、これまでも検討しているが再度考察を行って見たい。

“概況”においては“参加区域 朝鮮、台湾、樺太、北海道、関東庁、南洋庁、三府、四十県”とするが、四十県とする内訳はどうなるのだろうか。

そこで、最終的な県単位における参加を会誌“各館出品表”によりまとめたものが表8となる。これによると都道府を除き県単位の参加は青森、岩手、秋田、山形、茨城、栃木、群馬、埼玉、千葉、神奈川、新潟、富山、石川、福井、山梨、静岡、三重、滋賀、兵庫、和歌山、鳥取、山口、香川、愛媛、福岡、長崎、鹿児島、の27県に過ぎず、“概況”に記される“四十県”には遠く及ばない。但し、この数字には各県下で市独自の参加のあった、宮城(仙台市)、福島(若松市)、長野(長野市、松本市、上田市)、岐阜(岐阜市、大垣市)、愛知(名古屋市、豊橋市、岡崎市、一宮市)、奈良(奈良市)、岡山(岡山市、津山市)、広島(広島市、尾道市、呉市、福山市)、徳島(徳島市)、高知(高知市)、熊本(熊本市)、大分(別府市)、宮崎(宮崎市)、沖縄(那覇市)の14県を加えているようで、両者を合算すれば41県となる。

つまり、ここで記す“参加区域”の道府県は県単位だけではなく、各県下における市による参加も数え上げていることとなる。なお、府に三府として東京、京都、大阪が挙げられるが、この内、京都府は府としての参加がではなく、京都市の参加である。

以上より、“概況”に示す“参加区域”の内、府県数では、府県独自の参加数に加え、各府県下における市による参加数も“参

表 7 博覧会概要の比較

項目		「会誌」概要		『会場図』概要	
会期		昭和六年 八月二十一日ヨリ 九月三十日マデ		昭和六年 八月二十一日ヨリ 九月三十日マデ	
第一会場		長岡市中島町		長岡市中島町	
第二会場		寺泊港（水族館）		寺泊港（水族館）	
経費		52.6 万円		52.6 万円	
敷地		7,603ha		23,000 坪	
出品		2,594 小間		2,718 小間	
各府県館	棚 台 土間 計	612		612	
		133.5		133.5	
		35		35	
		815.5		815.5	
	新潟県館	315.5		182.5	
		－		950	
		22		52	
		359.5		381.5	
	長岡市館	157		157	
		15		15	
		110.5		110.5	
		393		393	
	機械館	6		6	
		216		216	
		438		438	
	農林館	－		15	
		－		19	
		－		25	
		43.75		84	
	健康館	－		80	
		－		85	
		－		165	
	満蒙館	土間	40	40	
	朝鮮館	土間	66	66	
	台湾館	土間	25	25	
	北海道館	土間	43	43	
	樺太館	土間	18	18	
	名古屋特設館	土間	40	40	
	奈良特設館	土間	－	18	
	計	1,090.5		1176.5	
		148.5		1570	
		677.25		677.25	
2,593.5		2718.5			
主建築		19,286 m ²	5,834.1 坪	5,870 坪	
出品本館		6,056	1831.9	1831.9	
長岡市出品館		2,079	629	629	
機械館		1,349	408.2	408.2	
健康館		694	210	253	
水道参考館		566	171.3	171.2	
蚕糸館		298	90	90	
農林／通信館		661	200	200	
郵便局出張所		53	16	16	
放送局特設館		172	52	51	
国防館		793	240	240	
鉄道記念館		165	50	50	
鉄道案内館		50	15	15	
野外ステージ		118	35.7	357	
正門		314	95	95	
朝鮮館		436	132	132	
台湾館		165	50	50	
北海道特設館		281	85	85	
樺太特設館		119	36	36	
名古屋市特設館		265	80	80	
奈良特設館		119	36	36	
京都物産館		198	60	60	
岐阜市特設館		99	30	30	
余興館		678	205	205	
水族館（第二会場）		265	80	80	
無料休憩所		219	67	67	
演芸館（協賛会）		1,457	440.6	440.6	
売店		397	120	120	
塔食堂其他雑建築		1,218	3,685	368.5	
計		19,286	5,834.1	5,877.1	

表 8 上越線全通記念博覧会への参加団体

参加県 番号	道府県名	道府県 としての 参加	参加市	その他の参加団体
	北海道	○		
1	青森	○		
2	岩手	○		
3	秋田	○	秋田市	
4	宮城		仙台市	
5	山形	○		
6	福島		若松市	喜多方漆器同業組合、原ノ町 櫨工芸研究会
7	茨城	○	水戸市	
8	栃木	○		足利織物組合
9	群馬	○		奥利根温泉組合
10	埼玉	○		
11	千葉	○		
	東京	○		
12	神奈川	○		
13	新潟	○	長岡市	
14	富山	○		
15	石川	○		
16	福井	○		
17	山梨	○		
18	長野		長野市、松本市、上田市	桔梗ヶ原葡萄酒組合
19	岐阜		岐阜市、大垣市	
20	静岡	○		
21	愛知		名古屋市、豊橋市、岡崎市、 一宮市	
22	三重	○		
23	滋賀	○		
	京都		京都市	
	大阪	○		
24	兵庫	○		
25	奈良		奈良市	
26	和歌山	○		
27	鳥取	○		
	島根			
28	岡山		岡山市、津山市	
29	広島		広島市、尾道市、呉市、福山 市	
30	山口	○	山口市	
31	徳島		徳島市	
32	香川	○		
33	愛媛	○		
34	高知		高知市	
35	福岡	○		日本足袋株式会社
	佐賀			
36	長崎	○		
37	熊本		熊本市	
38	大分		別府市	
39	宮崎		宮崎市	
40	鹿児島	○		
41	沖縄		那覇市	

凡例 道府県欄 ○：参加道府県 なお、会誌の 207 ～ 211 頁を参考にして作成した。

加区域”の府県数に合算しており、この場合、県としての参加は41県となり、“概況”の示す“四十県”とは異なることとなる。

なお、付言すれば、このように考えた場合、長岡市主催上越線全通記念博覧会への不参加県は島根と佐賀の2県に留まることとなる。

7 さいごに

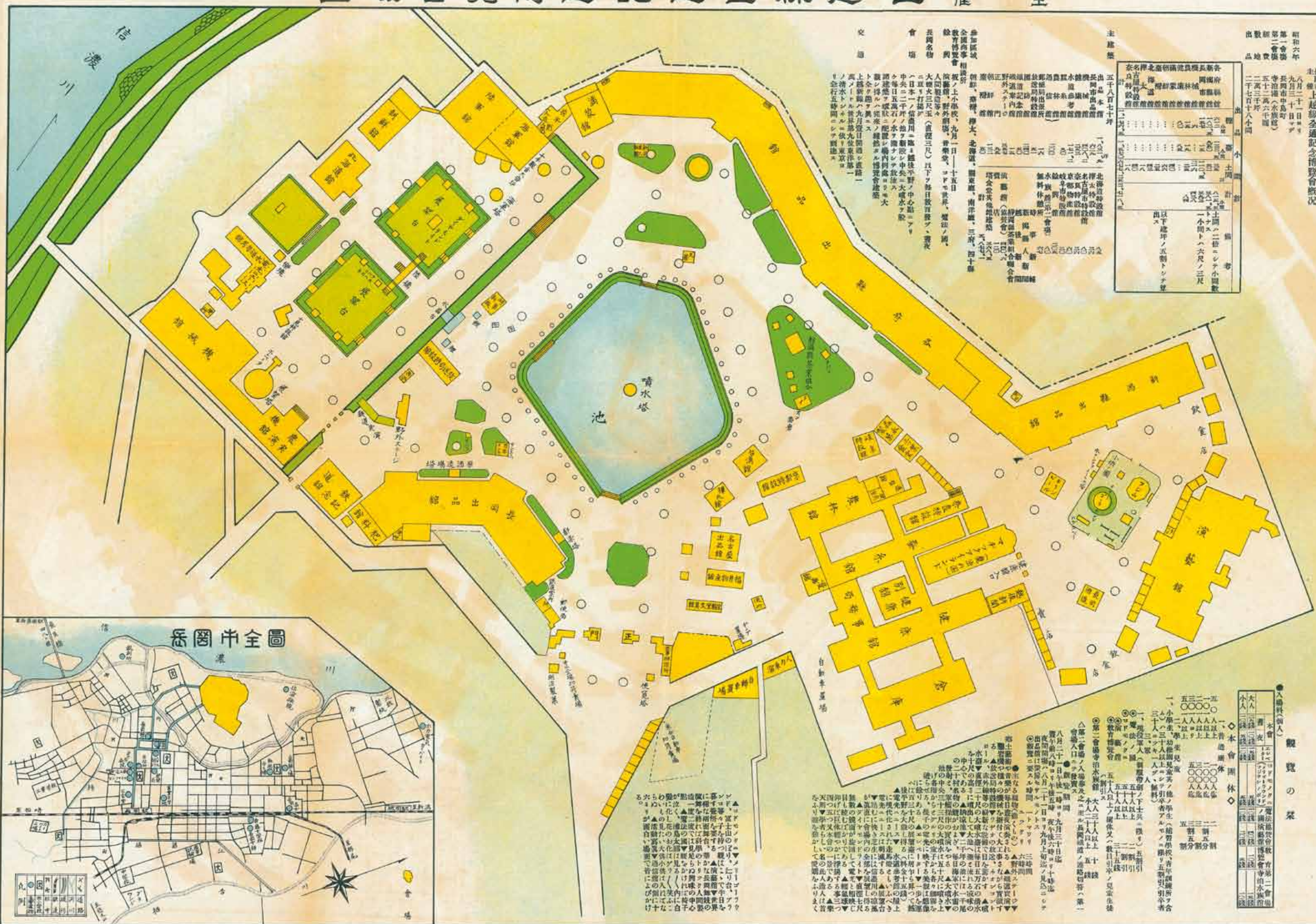
以上の考察から、『長岡市主催上越線全通記念博覧会場図』については次のようにまとめることができよう。

- 1) 『長岡市主催上越線全通記念博覧会場図』は昭和6(1931)年7月15日にまずは印刷され『会場図(長岡)』が発行され、『会場図(刈羽郡)』は8月1日に印刷された。
- 2) 『会場図(長岡)』と『会場図(刈羽郡)』を比較すると表面の「会場図」、「長岡市主催上越線全通記念博覧会概況」は同内容であるが、①『会場図(長岡)』で表面の“観覧の葉”が『会場図(刈羽郡)』では“在岡刈羽郡人会”“上越線全通記念博覧会郷土人接待委員”の名簿となる、②表面の“長岡市全図”の脇に在岡刈羽郡人会出張所の概要、“長岡市全図”中に凡例とその場所が描かれる、③①『会場図(長岡)』で裏面は白紙であるがの『会場図(刈羽郡)』では広告が印刷される、の3点に相違が見られる。
- 3) 長岡市主催上越線全通記念博覧会への参加区域は、朝鮮、台湾、樺太、北海道、関東庁、南洋庁、三府、四十一県で、府県には市単位の参加が含まれる。

注

- ¹ 長岡市主催上越線全通記念博覧会：長岡大観、昭和6(1931).8
- ² 長岡市：長岡市主催上越線全通記念博覧会誌、昭和7(1931).7
- ³ 長岡市：会誌、297～298頁、前掲
- ⁴ 北越水力電気株式会社を指すものであろう。
- ⁵ 柿川の渡里町付近より下流を18世紀以後、内川、更に以前は古川の呼び名があり、明治時代以後、柿川に統一されたという。長岡市：長岡歴史事典、59頁、平成16(2008).3
- ⁶ 表には“計”も付されるが合致しない。
- ⁷ 50mmを基準として、各マスでやや差異が認められる。
- ⁸ 朝鮮館、台湾館、北海道館（“主建築”では北海道特設館）、樺太館、名古屋特設館、奈良特設館の内、北海道館が建坪85坪に対し土間43坪と小数点以下が繰り上がる他はいずれも、土間坪数は建坪の5割となっている。
- ⁹ 長岡市：会誌、207～212頁、前掲
- ¹⁰ 長岡市：会誌、207頁、前掲

上越全通紀念博覽會場圖



上越全通紀念博覽會場圖

